

イエスのことば 第17回

そして彼らに言われた。「人の子は安息日の主です。」(ルカ 6:5)

□イエスの公生涯の起承転結

起：受洗から、メシア宣言(紀元27年の春、過越の祭り)を経て、宣教開始まで

承：メシアとしての権威を現わす。しかし結果的に、指導者層の拒否を受ける

転：弟子訓練

結：エルサレム入城から十字架(紀元30年の春、過越の祭り)、復活、昇天

□文脈の確認

1. 「承」の部に入っている。イエスが幾つもの出来事を通してメシアとしての権威を現わした時期である。
2. これまでに10の権威を見てきた。
 - (1) 病の癒しに関する権威。カナでの「遠距離かつ即時」の病の癒しであった。
 - (2) 教えに関する権威。ルカ4:32は記す、「人々はその教えに驚いた。そのことばに権威があったからである」
 - (3) 悪霊に対する権威。イエスが人に憑いていた悪霊を叱って、一言「この人から出て行け」と命じただけで、悪霊は出て行った。
 - (4) 病気に対する権威。シモン・ペテロの義母を慢性的な熱病から瞬時に解放した。
 - (5) 自然界に対する権威。昼間に網を下ろさせて大漁。ペテロたち5人の弟子がパートタイムの弟子からフルタイムの弟子へ。6番目の弟子としてヤコブが加わる。
 - (6) 律法上の汚れに対する権威。ツアラアト患者の清めがなされた。ユダヤ議会が、イエスはメシアである可能性ありと見て、公式調査に入った。
 - (7) 罪の赦しにおける権威。中風の人に、神の立場から罪の赦しを宣言したうえで、病気を癒した。公式調査(観察・審問・判定)は観察段階から審問段階へ。
 - (8) 人に対する権威。取税人レビ(マタイ)を7番目の弟子として加え、レビの家でのもてなしを受けて、取税人仲間や遊女と一緒に宴会の席に着いた。調査団からの非難に対して、「わたしは罪人を招いて悔い改めさせるために来た」と言われた。
 - (9) 人の伝統に対する権威。調査団から断食の伝統に従わないことについて質問され、メシアが来ている今は喜ぶべき時であり、断食する時ではないと答えた。また、ユダヤ教パリサイ派の伝統「言い伝え」について、イエスは、「古い衣・古い皮袋」のたとえ話を通して、メシアが提供するものとは関係がないと明言した。パリサイ派が抱いていた、「言い伝え」の完成者としてのメシア像を覆すものであった。
 - (10) 安息日に対する権威。紀元28年の春、過越の祭りのときに、イエスはエルサレムに上った。イエスは、意図的に安息日に関する言い伝えを破って、中風患者を癒

やした。エルサレムの指導者たちはイエスを非難したので、イエスはご自身の神性について語った。これにより、指導者たちの中で、イエスを排除しようとする動きが出始める。

3. 今回も、安息日に対するメシアの権威

- (1) 安息日に、イエスが麦畑を通っておられたときのことである。弟子たちが空腹のために、麦の穂を摘んで口に含んだ。そば近くで監視している調査団は、それを見て、安息日に関する規則違反として弟子たちとイエスを非難した。
- (2) これに対して、イエスは、「人の子は安息日の主である」と答えた。
 - ① 「人の子」とはメシアを指す称号である。
 - ② 「安息日の主」とは、メシアは安息日に仕えるのではなく、安息日に対して権威を持っているという意味である。
- (3) 当時のイスラエル民族、ユダヤ人たちは、安息日に仕える、安息日の奴隷となっていた。ユダヤ人たちを安息日の奴隷にしていたのは、当時のユダヤ人指導者層である。福音書では「パリサイ人たち」、「律法学者たち」と呼ばれている人々である。彼らは、安息日に関するだけで1500もの規則を作り、人々にそれを守らせていた。
- (4) これらのことを踏まえながら、本日のイエスのことばを学ぶ。

□本日のアウトライン

- A) 安息日について
- B) 麦の穂事件（ルカ 6：1～5、マルコ 2：23～28、マタイ 12：1～8）
- C) イエスの応答
 - (1) ダビデと供えのパン
 - (2) 安息日は仕事をせずに休む日であるが、すべての仕事に適用されるわけではない
 - (3) イエスは神殿よりも偉大である
 - (4) ある種類の仕事は、安息日においても認められていた
 - (5) メシアは安息日の主である
 - (6) 安息日に関する律法の目的
- D) キリスト教における日曜礼拝の伝統について

A) 安息日について

(1) モーセの律法

出 20：8～10 安息日を覚えて、これを聖なるものとせよ。六日間働いて、あなたのすべての仕事をせよ。七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはいかなる仕事もしてはならない。

- ① 「いかなる仕事もしてはならない」と命令している。この命令の目的は、奴隷から解放され自由の民となったイスラエル民族に、そのしるしとして休みの日を与えることである。奴隷には休みはない。
 - ② 「聖なるものとせよ」とは、他の日とは区別せよ、という意味。礼拝しなさい、ではない。安息日は、休む日である。
 - ③ 安息日の精神は、奴隷から解放され、自由とされたことを喜ぶことである。
- (2) ユダヤ教パリサイ派
- ① モーセの律法、613の規定を、完全に守るにはどうしたらよいか
 - 規定の優先順位を評価する
 - 社会的倫理的規定と儀式規定とに大別し、安息日はその両方にまたがる最も重要な規定と位置付ける
 - 613の規定ひとつひとつに、具体的細則を設けて、それを守るようにする
 - ② その結果、安息日に関する細則だけで、1500もの細則を生み出した。
 - ③ そして、安息日の重要性を強調して、次のように教えた。
 - 安息日を守るなら、その他のすべての律法を守ったことになる。安息日を破るなら、その他のすべての律法を破ったことになる。
 - もしすべてのユダヤ人が、1日でも完全に安息日を守るなら、メシアが来る。

B) 麦の穂事件（ルカ 6：1～2、マルコ 2：23～24、マタイ 12：1～2）

(1) 事件の背景

- ① 前回は、ヨハネの福音書 5 章、過越の祭りの期間中の安息日に、イエスが意図的に、ベテスダの池で中風の患者を癒やしたという出来事であった。今回は、それに続く事件である。
 - ② ルカ 6 章 1～11 節には、別々の安息日に起きた 2 つの事件について記す。1～5 節は麦の穂事件、6～11 節は右手の萎えた人を癒したという事件である。この癒しは、イエスが安息日に関する言い伝えを破って癒しを行うかどうか、イエスを訴える口実を見つけるために設定されたわなであったが、イエスは敢えて癒しを行ってみせた。
 - ③ 前回の「中風の患者の癒し」に端を発した安息日を巡るイエスとユダヤ指導者層との対立が、「麦の穂事件」、そして「右手の萎えた人の癒し事件」へと連続していく。3 つとも、安息日に起きた出来事である。
- (2) 麦の穂事件 3 つの福音書の記事を合わせると、次のようになる。
- ① ある安息日に、イエスが麦畑を歩いておられたときのことである。
 - ② 弟子たちは空腹であった。弟子たちは道を進みながら、穂を摘み始めた。弟子たちは穂を摘んで、手でもみながら食べていた。

- ③ すると、パリサイ人のうちの何人かが言った。「なぜあなたがたは、安息日にしてはならないことをするのですか。」
- ④ パリサイ人たちがイエスに言った。「ご覧なさい。あなたの弟子たちが、安息日にしてはならないことをしています。なぜ彼らは、安息日にしてはならないことをするのですか。」
- (3) 安息日にしてはならないこと
- ① ユダヤ教パリサイ派の「言い伝え」、安息日に関する規則だけでも 1500。
- ② 穂を摘み取ること、殻と実を分けること、殻を吹き飛ばして除くこと、実を挽いて粉にすること、これら 4 つのことは、いずれも安息日に禁止されていた。
- ③ 弟子たちは、穂を摘んだ・手でもんで殻と実を分けた・口に入れる前に殻を吹き飛ばしたであろう・手の平に残った実を口に入れて歯でつぶした（これは挽いて粉にするのと同じ）→ 4 つの規則を破ったことになる。

C) イエスの応答 (マタイ 12 : 3~8、マルコ 2 : 25~28、ルカ 6 : 3~5)

(1) ダビデと供えのパン (聖所の中に供えられたパン、「臨在のパン」とも訳される)

① 記事

- ダビデと供の者たちが空腹になったときに、ダビデが何をしたか、どのようにして、神の家に入り、祭司以外は自分も供の者たちも食べてはならない、臨在のパンを食べたか、読んだことがないのですか。(マタイ 12 : 3~4)
- ダビデと供の者たちが食べ物がなく空腹になったとき、ダビデが何をしたか、読んだことがないのですか。大祭司エブヤタルのころ、どのようにして、ダビデが神の家に入り、祭司以外の人が食べてはならない臨在のパンを食べて、一緒にいた人たちにも与えたか、読んだことがないのですか (マルコ 2 : 25~26)
- ダビデと供の者たちが空腹になったとき、ダビデが何をしたか、どのようにして、神の家に入り、祭司以外はだれも食べてはならない臨在のパンを取って食べ、供の者たちにも与えたか、読んだことがないのですか (ルカ 6 : 3~4)

② I サムエル記 21 章

- 4 節「聖別されたパン」、6 節「臨在のパン」
- ダビデと供の者たちが聖別されたパンを食べてよい条件=4 節「女たちから身を遠ざけているなら」→5 節「彼らのからだは聖別されています」・・・聖別する (出 19 : 10、15) =3 日間、女に近づいていないこと

③ 臨在のパン (出 25 : 30)、輪形のパン (レビ 24 : 5~6)

- ④ モーセの律法では、臨在のパンは、レビ族のアロンの家系の祭司のものとなる（レビ 24 : 9）。しかし、祭司がレビ族以外の人にそのパンを与えてはいけない、とは、モーセの律法は定めていない。I サム 21 章では、祭司アヒメレクは、そのパンをダビデと供の者たちに与えた。
- ⑤ 祭司以外は食べてはいけないと言ったのは、パリサイ派の言い伝えである。パリサイ派は言い伝えの正当性を主張するために、それは実はモーセのときから存在していたと主張した。書かれてはいないが、モーセから代々口伝で継承されて来たと言っていた。よって、パリサイ派の教えのとおりなら、ダビデのときにも、臨在のパンを祭司以外は食べてはいけないという規則が存在したはずである。しかし、実際に祭司はダビデに与え、ダビデはそれを食べた。イエスは、パリサイ派の主張は矛盾していると、指摘している。
- (2) 安息日は仕事をせずに休む日であるが、すべての仕事に適用されるわけではない
- ① 記事：また安息日に宮にいる祭司たちは安息日を汚しても咎を免れる、というのを律法で読んだことがないのですか。（マタイ 12 : 5）
- ② 神殿では、祭司たちが、安息日には他の日以上に忙しく立ち働く。
- (3) イエスは神殿よりも偉大である
- ① 記事：あなたがたに言いますが、ここに宮よりも大いなるものがあります。（マタイ 12 : 6）
- ② 神殿では、祭司たちが安息日に立ち働いても律法違反にならない。メシアは神殿よりも大いなるお方である。メシアの權威において、誰かが安息日にある種の仕事をすることを許すことは、当然メシアにはできる。
- (4) ある種類の仕事は、安息日においても認められていた
- ① 記事：『わたしが喜びとするのは真実の愛。いけにえではない』とはどういう意味かを知っていたら、あなたがたは、咎のない者たちを不義に定めはしなかったでしょう。（マタイ 12 : 7）
- ② ホセア 6 : 6 の引用。「真実の愛」、愛は「憐れみ」とも訳せる。
- ③ パリサイ派の指導者たちも、必要性のある仕事と憐れみに基づく仕事は、安息日でも当然認めていた。食事をすることは、必要性のあることである。人の病気やけがを治療することは、憐れみに基づく仕事である。
- (5) メシアは安息日の主である
- ① 記事
- 人の子は安息日の主です。（マタイ 12 : 8）
 - 人の子は安息日にも主です。（マルコ 2 : 28）
 - 人の子は安息日の主です。（ルカ 6 : 5）
- ② 「安息日の主」とは、安息日に何をしてよいのか、してはならないのかを、決める權威を持っているということ。メシアは、パリサイ派が禁止すること

でも許すことができるし、逆にパリサイ派が許すことを禁止することもできる。

(6) 安息日に関する律法の目的

- ① 記事：安息日は人のために設けられたのです。人が安息日のために造られたものではありません。(マルコ 2 : 27)
- ② パリサイ派は、イスラエル民族は安息日のために造られたと教えた。
 - 1週間のうち、2日単位のペアは3組できる。7日目の安息日だけがペアができない。そこで安息日は、神の前に出て来て、自分にも花婿を与えてほしいと願い求めた。神は、安息日のために、イスラエル民族を造った。よって、イスラエル民族は安息日の花婿である。
 - ラビによっては、安息日を「女王」と表現した。→ 現代に至るまでユダヤ教の会堂では、金曜日の夕方から夜に入るとき、すなわち安息日が始まる時には、会堂のドアを開け、安息日を迎える歌を歌う。「来たれ、愛される者よ、我らが偉大なる女王、安息日よ」
- ③ イエスは、そうではなく、逆に、安息日がイスラエル民族のために与えられたのだと教えた。安息日は、イスラエルがエジプトの奴隷から解放され、自由の民となったことのしるしである。奴隷に休みはない。
- ④ この安息日の本来の目的にもかかわらず、パリサイ派は 1500 もの規則を作って、イスラエルの人々を縛り、安息日の奴隷としてしまった。

D) キリスト教における日曜礼拝の伝統について

- (1) パリサイ派だけでなく、教会もまた、その後の教会史において、安息日を誤って適用してしまった。
 - ① 日曜日を、新しい安息日とみなした。
 - ② その日を「礼拝の日」として法律や規則で定めて、信者に参加義務を課した。
- (2) 聖書は、決して、日曜日を聖なる日とせよとは命じていない。日曜日を「主の日」と呼び、その日の礼拝を「主日礼拝(しゅじつれいはい)」と呼ぶのも、根拠は全くない。聖書において、「主の日」とは、大患難期を指す。
- (3) イエスをメシアとして信じる信者たちは・・・
 - ① 目に見えない普遍的教会に属する
 - ② 同時にこの地上において、目に見える地域教会のメンバーとして、イエスの復活を信じ、イエスの再臨を待ち望む者たちである。
- (4) 聖書は、地域教会の信者たちに対して、**定期的**に(週 1 回程度)集まるように命じているが、何曜日の何時に集まるかは、それぞれの地域教会に委ねられている。